



◎ 学術メディアセンター棟

運用開始

國學院大學
研究開発推進機構
機構ニュース

Vol. 2 No. 1
 発行人 阪本 是丸
 編集人 松本 久史
 〒150-8440 東京都渋谷区東
 4丁目10番28号
 電話 (03) 5466-0162
 FAX (03) 5466-9237

昨年四月に発足した研究開発推進機構は、各機関が本館・若木タワーに分散し、いわば「仮住い」であったが、学術メディアセンター棟（AMC棟）の竣工祭が三月二十五日に斎行され、各機関の移転が完了し、今年度から本格的な運用が開始された。まずは、AMC棟の完成・移転に尽力した諸関係者に感謝の意を表したい。

地上五階・地下二階のAMC棟は、棟内すべてが機構、図書館および情報センターといった、本学における研究とそれを生かした教育の基盤を担う組織のための施設であり、研究組織の連携強化のために不可欠な場の集約化を主眼として計画された。地下一階には伝統文化リサーチセンター本部・資料館および研究スペース、収蔵庫。一階には研究開発推進機構事務課、研究開発推進員室。五階には機構各機関の共同研究スペースや研究室、会議室などが配置されている。この研究施設・機関を集中した運用は、「國學院大學

目次

◆ 学術メディアセンター棟 運用開始	1
◆ 事業紹介	
◇ 日本文化研究所（一）	
「デジタル・ミュージアムの構築と展開」	井上順孝 2
◇ 日本文化研究所（二）	
「近世国学の靈魂観をめぐるテキストと実践の研究―靈察・靈社・神葬祭―」	松本久史 3
◇ 学術資料館	
「近代学術資産のデジタル化・データベース化による再生生活用の研究」	小川直之 4
◇ 学術資料館（考古学資料館）（一）	
「考古学資料館収蔵資料の再整理・修復および基礎研究」公開	内川隆志 5
◇ 学術資料館（考古学資料館）（二）	
「山形県庄内町須部野A遺跡学術調査」	内川隆志 6
◇ 学術資料館（神道資料館）	
「神道資料の整理公開と学術的価値の探求」	加瀬直弥 7
◇ 校史・学術資産研究センター（一）	
「國學院大學における大学アーカイヴス体制の構築」	齊藤智朗 7
◇ 校史・学術資産研究センター（二）	
「國學院大學の学術資産の研究と公開」	齊藤智朗 8
◇ 研究開発推進センター（一）	
「招魂と慰霊の系譜に関する基礎的研究」	中山 郁 9
◇ 研究開発推進センター（二）	
「神社研究事業」	太田直之 10
◇ 研究開発推進センター（三）	
「二十一世紀COEプログラム 「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」後継事業」	16 14 12 11
◆ 事業計画・人事一覧	
◆ 彙報	
◆ 所感資料紹介	

二十一世紀研究教育計画」が推進する渋谷キャンパス再開発構想の具現化であり、世界レベルの研究拠点としての機能が整備されたことも意味する。したがって、AMC棟への機構の移転は、機構にとって単なる引越しではなく、昨年度の機構発足同様、全学的研究教育体制の重要な再編成として位置づけられる。

これを期に機構では新たな事業計画を策定して本格的な活動を開始している。文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」やデジタル・ミュージアムプロジェクトなど、前年度からの継続事業もあいまって、単なるハードの充実にとどまらず、それに相応しいソフトを提供していくこととなる。

事業紹介 日本文化研究所(一)

「デジタル・ミュージアムの構築と展開」

井上 順孝

本プロジェクトは、本年度の計画に基づき、研究開発推進機構全体におけるデジタル・ミュージアム構想を推進するとともに、独自のコンテンツの充実を図る。教派神道および現代宗教に関する資料・データの収集とその一部をオンライン公開し、国際交流を推進するために、十月に国際フォーラムを実施する。これらの概要について以下に説明する。

一、機構全体のデジタル・ミュージアム構想の推進

これについては昨年度よりの懸案であった統一的なソフトの導入が実現される。これまで各プロジェクトにより独自に構築されていたウェブ情報、データベース等を、同じソフトを用いて構築する。これにより、コンテンツ作成及びその維持が容易になる。また統一感が生まれるので、利用者にとっても利用しやすいサイトとなる。

ソフト導入に関しては、ワーキンググループを設置し、慎重な検討の

結果、富士通のミューズテックを採用することが決定した。富士通側とはたびたび意見を交わし、どのような仕様にするか、どの程度のカスタマイズを依頼するかなど、基本的な問題の確定に努めている。これまで公開されているデータ形式もそれぞれ異なり、また今後の使用方法についても、目指すところが多様であるので、それらをすべて包括できるように調整が必要となる。データの移し替えを含め、基本的作業にかなりの時間を要するが、本年度末までには、すべてのサイトを新しいものに移行できるように準備を進めているところである。

なお、デジタル・ミュージアムプロジェクトでは、大学専任教員が関わった科学研究費補助金、その他外部資金を得て作成したデータベースの公開にも対応できるようにしたいという意図をもっている。

二、独自のコンテンツ構築

オンライン事典として、国際的にも広く知られるようになったEOS

(Encyclopedia of Shinto)は、元の事典である『神道事典』の本文がすべて英訳され、またグロッサリーも作成された。五月の時点で八十万以上のアクセス数を記録している。

昨年度より初心者用のサイト構築を開始し、神社境内図がすでにアップロードされている。これは神道関係の用語を知らない外国人でも、絵を見て、それが日本語でなんと書かれているか、どういうものかが分かるようになっていく。さらに詳しく知りたい人は、EOSの関連項目にリンクされているので、専門的な知識も得ることが出来る。

境内図に次いで、社務所の図も作成され、さらに人生儀礼・年中行事の図等が予定されている。使い方を工夫すれば、日本人学生にも便利なものとなるはずである。図の作成は神社のポスター作成などの経験がある神道文化学部学生に依頼している。神道についてのある程度の知識を有する学生が描いた絵であるので、細部に至るまで正確さを追求することが出来る。(図参照)

この他、元の事典にはない新しい項目の必要性(たとえば特殊神饌など)が感じられたので、これらについては、少しずつ追加していくことにしている。

EOSを補完し、さらに国際的な研究交流を展開させていくために、日本語の論文を英語その他の言語に、

また外国語の論文を日本語に翻訳するという作業が開始されているが、本年度もこれを進行させ、さらに充実したものとしていく。

三、教派神道および現代宗教

黒住教、神理教及び神道修成派の基礎資料(マイクロフィルム及びコピー)として収集したもの)のデジタル化がかなりの部分終了したので、教団本部と協議の上、どの資料をオンラインで公開するかについて決定する。

合意が成立した部分については、ミューズテックを用いて公開のためのレイアウトを行い、完了した時点で公開に着手する。

四、国際フォーラム

二十一世紀COEプログラムで確立された国際的な研究交流を持続させるために、定期的に国際フォーラムないし、国際シンポジウムを開催していく予定である。本年は十月二十六日に二部構成で国際フォーラムを実施する。テーマは、「ウェブ経由の神道・日本宗教—インターネット時代の宗教文化教育のゆくえ—」である。場所は常磐松ホール、その他の施設を用いる。

第一部では日本人、及び外国人の若手研究者を招いてパネルディスカッションを行う。十名前後のパネリストを予定しているが、会場の参

加者にもできるだけ発言を求め、自らな討議を行う。

第二部では招聘外国人を含め、数名の発題者、コメンテーターによる議論を中心とする。これも比較的若手の研究者を中心とする構成になる予定である。情報化がますます進行していくという研究・教育環境の中で、どのように神道・日本宗教についての情報を交換したらいいのか、また適切な宗教文化教育はどのようにして構築されるかなど、これからの研究者が直面する課題に取り組み予定である。

このフォーラムは、科学研究費補助金基盤研究(A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」(研究代表者・大正大学教授星野英紀)との共催という形式をとる予定である。研究分担者として、本プロジェクトの井上順孝、黒崎浩行、平藤喜久子が加わっていることによるものである。

なお、本年度の本プロジェクトのメンバーは左記のとおりである。

責任者 井上順孝
分担者

・専任教員 平藤喜久子、星野靖二

・兼任教員 石井研士、黒崎浩行、ノーマン・ハイヴンス

Overview of a Shinto Shrine



Eme	Naomi	Warden	Kaplan	Kenneth	Masako	Osaka	Osaka	Osaka	Osaka
Eme	Naomi	Warden	Kaplan	Kenneth	Masako	Osaka	Osaka	Osaka	Osaka

- ・客員研究員 市川収
- ・PD研究員 市田雅崇、大澤広嗣
- ・研究補助員 李和珍、ジェシー・ラフィーバ、ラウラ・ココラ
- ・共同研究員
- アンネマリー・アイフラ、江島尚俊、エリック・シッケタッツ、高橋典史、武井順介、ドロシア・フィルス、松本喜似子、山田美紀子
- * EOSのURL
<http://eos.kokugakuin.ac.jp>

事業紹介 日本文化研究所(二)

「近世国学の靈魂観をめぐるテキストと実践の研究—靈祭・靈社・神葬祭—」

松本久史

本プロジェクトは、近世国学を対象とし、靈魂観をめぐる思想の形成と社会的実践を明らかにすることを目的としており、本年度から開始され、三ヶ年にわたる研究プロジェクトである。平成十九年度に日本文化研究所の単年度のプロジェクトとして行われた「近世国学の靈魂観をめぐる思想と行動の研究」の成果と課題を継承し、展開させるものである。

具体的な研究としては、国学の死生観や死に関わる諸儀礼について、史料にもとづく実証的な方法で明らかにする。すなわち、テキストの内容分析、および内容・流通などを含めた当該テキストの社会的存在形態の把握、在地の神職や国学者らによる葬祭・靈祭や靈社の建立などの実践・行動の実証的理解を通じて総合的理解を目指す。今後、左記の各項目にしたがって研究を遂行する。

一、国学の靈魂観関係の主要テキストの分析

(一) 国学者の靈魂論・幽冥論

- (二) 神葬祭関係書の収集と調査
- 二、神葬祭・靈祭・靈社建立を中心とした社会的運動の分析
 - (一) 鈴門における靈魂観と実践—靈祭・靈社・神葬祭—
 - (二) 平田国学における幽冥観の拡散・多様化
- 三、研究成果の公開

これらの各項目のうち、今年度はつぎのような具体的な事業を予定している。

- 一 について (一) では、国学者の靈魂論・幽冥論関係テキストの調査・収集を行う。既に昨年度のプロジェククトにおいて一次リストを作成しているが、本年度はそれを拡充するとともに、必要なテキストについては、撮影・複写などの方法で収集する。他方、平田国学をはじめ国学者の靈魂観を考えるうえでの基本書といえる平田篤胤『靈能真柱』については研究会を組織して精読・校注の作業を開始した。版本のバージョンはいくつかあり、正確な検討が必要とさ

れるが、この作業開始にあたっては、まず東京大学本居文庫所蔵の版本を対象とした。(二)では、神葬祭関係書の調査・収集・分析を行う。後述の鈴門国学者の実践運動の研究と連動する形で、地域の運動において重要な意味を持った書籍についても視野に収める。

二について(一)では、鈴門における霊魂観と実践に関する地域調査を実施する。特にいわゆる三大考・霊能真柱論争で本居大平と篤胤の仲介的役割を果たした遠州国学者の夏目覺磨と、以降の同国における真淵・宣長の霊祭の実践について史料に基づき分析を行う。さらに、石見国の小篠敏、因幡国の飯田年平など、山陰地方における鈴門系国学者の活動の調査に着手する。(二)では、昨年度のプロジェクトで三河国の国学者による運動については調査を開始しているが、本年度はそれをさらに展開し、同国における神葬祭運動の具体的な内容分析に進みたい。明治維新後の中央における神葬祭をめぐる動向との関係についても考察する予定である。また、長年にわたって継続している、相馬の平田門人高玉家文書についての研究会を本年度も実施しており、すでに数回行っている。これについては、平成二十二年度における研究公開を目標としつつ、本年度は未翻刻史料の読解・翻刻を

中心に進める。また、気吹舎関係者の幽冥観に関する調査・研究も並行して行う。六人部是香関係史料、津和野の神葬祭関係史料などがその内容である。

三について 研究会の成果として高玉家文書の既翻刻部分に校正を加

事業紹介 学術資料館

「近代学術資産のデジタル化・データベース化による再生活用の研究」

小川直之

え、内容の確認・調査を行い、紀要等で公開する予定である。

以上、三か年計画の一年目として、本年度は史料調査や読解・内容分析を中心とした研究を遂行する予定である。最終年度での成果公開に向け、ためみなく進めていきたい。

学術フロントティア推進事業の継承と成果

本プロジェクトは平成十一年度から十七年度までの七年間にわたって文部科学省の私立大学学術研究高度化推進事業・学術フロントティア推進事業に開始され、研究活動を行ってきた「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」を引き継ぐものである。日本文化研究所・大学院文学研究科の共同プロジェクトとして平成十一年度に開始され、学内に資料デジタル化研究室(本館地下)を設置し、学外研究者もメンバーに加えての研究で、当初は平成十一年度から十五年度の五ヶ年の計画であつ

たが、研究進展に従って二ヶ年の継続が認められた。平成十六年度からは学外研究者に、さらに本学図書館・考古学資料館・神道資料館・折口博士記念古代研究所を加えたプロジェクトとし、十七年度まで補助事業として実施された。その後、十八年度は日本文化研究所共同プロジェクトとして、十九年度は研究開発推進機構日本文化研究所の「デジタル・ミュージアムの構築と展開」のサブプロジェクトとして継続し、さらに平成二十年度からは対象資料の所蔵の関係から学術資料館プロジェクトとし、名称も標題のように変更して引き継いでいる。

平成十九年度までの研究成果は、本学ホームページ上に「國學院大學学術資料データベース」として、大

場磐雄博士写真資料、大場磐雄博士資料、柴田常恵写真資料、折口信夫博士歌舞伎伎葉書資料、宮地直一博士写真資料、杉山林継博士収蔵資料、考古学資料館所蔵縄文土器と、皇學館大学神道研究所蔵の原田敏明每文社文庫写真資料を公開するほか、『人文科学と画像資料研究』第一〜五集、柴田常恵、大場磐雄、宮地直一、折口信夫による写真資料等の目録を刊行し、さらに平成十九年度には学術フロントティア推進事業以降の研究・実務経験をもとに、黒崎浩行の編集で『写真資料デジタル化の手引き』保存と研究活用のために一』を刊行した。

皇學館大学神道資料館の原田敏明每文社文庫の写真資料公開は、本学と皇學館大学との教育・学術研究交流に関する協定に基づく連携の成果である。

目的と活動概要

学術フロントティア推進事業「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」とその後の研究活動を引き継ぐ本プロジェクトは、学内に所蔵されている画像資料を中心とする学術資料アーカイブスの構築を目的としている。アーカイビングは資料

のデジタル化、分類整理と保存、データベース化と情報のリレーション、公開の四段階の作業を内容とし、この過程においては考古学、民俗学、神道学、文化財学など、既存の学問領域を超えながらの学際的研究や人文資料情報学の構築など、新たな研究の枠組みを提示することも目指している。アーカイブスとしての公開は、いうまでもなく研究・教育等での活用を目的とする。

人文科学における研究活動は、文書・記録類による文字資料、遺物・構築物などによる造形資料、身体・言語・感性などによる伝承資料によって研究が行われてきたが、これらに第四の資料群として、画像(写真)資料を加える時代になっている。幕末に日本にもたらされた写真技術は近代になって急速に広まり、明治時代後半からは人類学や考古学分野でいち早く写真が研究資料として用いられるようになった。プロジェクト名の「近代学術資産」という用語は、こうした動向の中で蓄積された画像(写真)資料、また一方では写真の大量化によって膨大に撮影された「もの」や「こと」の写真を、改めて学術資料化しようという意図を表したものである。

平成二十年度は、学術資料館の専任である内川隆志・加藤里美・加瀬直弥、兼担である黒崎浩行・小川直

之をプロジェクトメンバーとし、平成十九年度に引き続き、明治末以降に制作された神社絵葉書について宮地直一博士資料に含まれる分のアーカイビングと、柴田常恵資料に含まれている墨拓のデータベース化を中心に進めている。神社絵葉書については、平成十八年度に神道資料館所蔵分のデジタル化とデータベース化を行っており、これに宮地博士資料を加えて神社絵葉書アーカイブを構築していく。日本各地の神社には、

社殿や祭礼などの古写真を所有するところが多くあり、将来的にはこうした写真資料とのリレーションも視野に入れたアーカイブ構築を目指している。

学術フロンティア推進事業としての研究成果を公開している大場博士などの学術データベースとともに、本プロジェクトの成果は、研究開発推進機構で準備が進んでいるデジタル・ミュージアムの情報ソースの一つとなる予定である。

事業紹介 学術資料館(考古学資料館)(一)

「考古学資料館収蔵資料の再整理・修復 および基礎研究・公開」

内川 隆 志

考古学資料館は、おおよそ十万点に及ぶ資料を収蔵している。内外の考古資料がその主たるものであるが、各地の民族・民俗資料なども少なくない。収蔵資料には、創設者樋口清之博士が寄贈された多数の考古遺物の他に、開館から八十年を経過する中で、寄贈・購入・学術発掘調査などによって蒐集された膨大な、実物資料を蓄積している。これらの多くは、数度にわたる移動や時間経過に

よる様々な要因によって、一部混乱し再整理が必要な状態となっているものも多数ある。また、経年による修復素材の劣化によって再修理が必要な資料も数多く認められることから博物館のリニューアルを機に順次全体の再整理と修復を進めていく計画を立てた。再整理は、収蔵資料の多岐に渡る活用の際し、必要不可欠な作業であり、完成すれば資料の保存と活用に益することは間違いない。

例えば、これまで実現できなかった全収蔵品目録の刊行や館蔵資料の詳細な内容把握が可能となるだけでなく、展示や資料活用などに対応する事ができる。これらの一連の作業はこれまでもある程度継続して行われてきており、成果の一部が既に学術資料データベースでも公開・活用されている。

今年度は、寄贈個人コレクションならびに旧石器時代・縄文時代の一部について再整理・修復を行って行く予定である。旧石器時代では、白滝遺跡群・置戸安住遺跡・柳又遺跡・小坂遺跡・伊勢見山遺跡他の遺物について再整理を実施する。縄文時代では、石小屋洞窟・壬遺跡・西谷遺跡等の草創期資料と、進捗具合にもよるが早期の一部まで実施できれば上出来であろう。これまで寄贈された個人コレクションには、野口義麿氏・柁島隆氏・徳富蘇峰氏・上川名昭氏・服部和彦氏・吉谷昭彦氏などがその主立ったもので、小野良弘氏など好意的に移管していただいているコレクションなどもある。寄贈個人コレクションについては、寄贈後その都度『考古学資料館要覧』というかたちで目録を出してきたが、資料数の多いコレクションなどは要覧だけでは掲載しきれないものもあったため、再度中身と内容の把握をかねて再整理を進めることとした。

再整理の成果として、個々の資料は一覧表化して収蔵庫・展示室での配架に対応し、管理上利用しやすいように考慮したものとしていく。また、今秋に予定している伝統文化リサーチセンター資料館の全面開館に伴い、展示資料の化粧直しとも言ふべき資料の修復、補彩も全時代に互って実

施しなければならず、作業量は膨大なものになるものと予想される。さらに、展示室において資料説明を加えるデジタルコンテンツについても資料画像を時代別に随時製作し、基礎情報・解説を加えて準備を進めている。

如き結果が得られた。

(一) みたらせ池は旧河川を盛土によって堰き止め、人工的に造営された可能性が高く、浅い部分にはテラス状の遺構が存在していた可能性がある。金属探査では、特に顕著な反応は認められなかった。池の最深部は約3mを測り、地震によると思われる地層の亀裂が存在する。

(二) 伊波神社周辺に人工構造地盤の状況が顕著に認められ、土塁状に東に延びる。

(三) みたらせ池より東側に拡がる平地は、人工構造地盤として捉えられ、地中内には各所に土質的な反応が認められる。

(四) 開山塚は既に開封された可能性が高く、主体部の一部が残存している可能性が認められる。

平成十九年度は、元羽黒の南方一五〇メートルの地点に所在する行者塚の測量調査を実施した。行者塚には、かつて塚の四隅に墓標の老松が四本あったことから、四本松とも称されている。塚は現状では、頂部を除いて一面藪が繁茂し、その形

状すら明確ではなかったが、二日ばかりで除去し、おおよその形が明らかとなった。平面形状は、一辺約十五メートルの方形を呈し、周囲には幅約四メートルの周溝が巡らされている。盛り土は約二メートルの高さで、頂部を整えて平坦面としている。盛り土の一部が流れたのか、辺の中央部がやや窪み気味であるが、もともとは方形基壇状に積み整えられていたものと推察される。頂部平坦面中央には、基台に乗せられた長円形の塔身を置いた無縫塔が据え置かれている。墓石には不鮮明ながら正面に「一世行者□海」、の文字が刻される。斎藤重作氏は「一世行者永海」である可能性を示唆し（『立谷沢村史』）、地元の伝承でも永海上人の伝説が語り継がれていることから有力視できるものである。

以上、行者塚の平面実測と所見について概要を述べた。塚はその規模が大きいことから徳の高い僧職にあった人物の墓、海号を持つことから入定塚である可能性が高い。明治二十年の発掘口伝では甕に納入されていたとされたことから、一度他所で入定し再葬された可能性もある。何れにしても塚のより正確な形状を明らかにし、主体部の状況確認をするためには、トレンチ調査などでより多くの所見を得る必要がある。ここ皇野の地は、平成十八年の

事業紹介 学術資料館（考古学資料館）（二）

「山形県庄内町須部野A遺跡学術調査」

内川 隆 志

考古学資料館では、わが国の基層文化の解明を目的とした調査・研究活動を設立理念の一つとし、その研究活動の一環として祭祀遺跡の調査に取り組んでいる。平成十八年度から継続している山形県庄内町須部野A遺跡の学術調査は、考古学的視点から羽黒信仰にかかる具体的資料を明らかにし、その信仰解明の一助となることを目的としている。平成十七年度に予備調査を実施した須部野A遺跡一帯は元羽黒と呼ばれ、羽黒山開山の蜂子皇子と縁の深い土地である。「すべの」は本来、皇野と書き、蜂子皇子縁の地名である。皇野には伊波神社を祀った式

内社とさらに「みたらせ池」が所在する。この霊池からは昭和三十二年（一九五七）に六面の和鏡が発見されたと口伝され（『山形県史』第一巻 原始・古代・中世編 一九八二—五七三頁）、羽黒山頂の御手洗池（鏡ヶ池）と同種の水中納鏡の事例として注目された。付近にはさらに蜂子皇子の墓とされる開山塚や行者塚、稚児塚と呼ばれる墳丘が散見されるなど歴史的雰囲気濃厚な場所でもある。

平成十八年度の予備調査では、主に「みたらせ池」周辺を地中レーダー探査、金属探知機によって遺構、遺物反応を確認した結果、概ね次の

地中探査レーダー調査によっても明らかかなように、極めて人工的な造成によって整地されている。この事実は皇野台地一帯が室町時代まで大皇山満納寺の寺領であり、五百以上の坊舎が軒を並べ、大いに繁栄したという事実と符合する。レーダー調査では、台地のいたるところに造営さ

れた井戸や各種遺構の可能性のある反応もあり興味深い。

平成二十年度については、本プロジェクト最終年度ということで、皇野一帯の歴史的環境の見直しと庄内地方における入定塚の情報整理のための収集調査を実施し、羽黒信仰の

インターネット上で発信することを目指に置いた。これにより、機構唯一の神道資料を専門に研究展示する部門としての貢献を果たしたい。こうした趣旨に基づき業務が遂行されるが、具体的な業務は次の通りである。

(一) 神道資料館所蔵資料の整理保存とデータベース化

神道資料館所蔵資料の整理は本事業の基本に置かれるものである。神道資料館には神道祭祀に用いられる器具や装束を中心として、屏風や彫刻などさまざまな美術工芸品が所蔵されているが、それらを広く研究に提供するための管理体制をこれまでに以上で確実なものとする。具体的には所蔵資料の再整理とデータベース化を行う。

(二) 所蔵資料に関連する学術情報の集積

同時に、本学の図書館等、学内機

関に所蔵される資料などの把握を行うことで、神道研究を行う研究者や学生等への便宜を図るための基礎的作業を行う。また、所蔵資料の多数を占める神社祭祀関係資料から、祭祀において神社がいかなる場であったか、オープン・リサーチ・センター選定事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」との連携も視野に入れて検討を図りたい。

こうした作業を行うことで、神道資料館自体をより開かれた資料所蔵機関として発展させるとともに、神道研究に関する情報の一集積点として発展させることを目指す。ほかの組織と兼務する、任期制若手教員二人(加瀬・森)が推進する事業であるため、事業の完遂には困難が伴うが、最低限の基盤を作り、後の世代に発展を託すところまではしていきたいと考えている。

事業紹介 学術資料館(神道資料館) 「神道資料の整理公開と学術的価値の探求」

加瀬 直 弥

神道資料館(学術資料館神道資料館部門)は、前身である「神道学資料室」の昭和三十八(一九六三)年の開設以来神道資料の収集展示に つとめており、これまで、大嘗祭や伊勢の神宮の式年遷宮に関する特別展等各種展示や、『神社祭祀図の研究』『國學院大學所蔵の牛玉宝印』などの刊行によって、その所蔵資料の積極的な公開を行ってきた。こうした活動は、神道精神を建学の精神とする國學院大學の理念に即して行われてきたものであることはいまでもない。

そしてこのたび神道資料館は、研究開発推進機構の発足による学内研究機関・施設との連携強化に伴い、

「神道研究に資する資料の把握と公開のための拠点」として、あらたなスタートを切ることになった。これに当たって、本館の神道資料に関する情報収集の能力を向上させ、単に神道資料館所蔵品のみならず、学内全体の神道関係資料の把握を行い、その学術的価値を見いだすことを企図した。今回紹介する「神道資料の整理公開と学術的価値の探求」(以下「本事業」)は、その課題克服の基礎となる事業として策定したものである。事業名の通り、本事業では、所蔵資料を中心とする学内神道資料の整理を行い、特徴的な資料については、広く神道研究に供することができるよう基礎的分析を加え、

事業紹介 校史・学術資産研究センター(一) 「國學院大學における 大学アーカイヴズ体制の構築」

齊藤 智朗

本事業は、國學院大學の歴史及び本学の有する学術資産の研究を行い、その成果を社会に還元すること

を目的とする校史・学術資産研究センターの中核である校史研究部門の基礎となるものであり、本学にお

ける校史資料の収集・保存・管理・閲覧体制の確立を目指すとともに、校史に関する学術研究を行い、その成果を広く社会に発信する「大学アーカイヴズ」の体制を構築することを目的とするものである。

「大学の個性化」という近年の社会的要請に基づき、各大学で大学アーカイヴズ体制の構築が積極的に展開されている今日、本学が歩んできた歴史の独自性を明らかにすることは喫緊の課題である。

本学の校史については、『皇典講究所五十年史』をはじめ、『國學院大學八十五年史』及び同史料篇『國學院大學百年史』などにより、通史的な変遷や本学の運営・事業に携わった人物の活動などを知ることが可能だが、それでもなお皇典講究所と國學院との関係や性格の差異(制度・人的構成の変遷)、皇典講究所・國學院における研究・教育活動の実態など、本学の校史研究における課題はまだ数多く残されている。

そのため、本事業では、校史資料の収集・保存・管理・閲覧体制の確立を目指すとともに、本学の制度に関する歴史的な資料の整理と研究を行うことで、本学の組織的な変遷や運営・事業に携わった人物の活動をより詳細かつ具体的に把握することに努める。また、校史教育用テキスト(コンパクトな校史あるいは

テーマをしぼった関係資料など)を作成して、本学における校史教育のシステムの整備を目指す。さらに本事業においては、将来を見据え、学内の現用文書から非現用文書(校史資料)への移行の問題や、学内文書の法人申請業務などへの円滑な活用などを検討することも視野に入れている。

また、校史の研究・教育体制を確立するためには、当然学内他機関との協力関係構築も不可欠となる。

即ち、本事業は、校史研究部門が今後長期的に継続して行う大学アーカイヴズ体制確立のための出発点として位置付けられるものである。

以上のような本事業の目的に則り、校史資料の収集や保存を継続的に行っていくことと合わせて、まず、文書関係の資料を中心に整理し、当該資料を活用した研究を行うていく。

とりわけ、本事業の初年度となる平成二十年度においては、まず『國學院大學百年史』を編纂する際に活用された「百年史基本資料」や、戦前の学内公文書の整理・研究に着手する。そして、本学における大学アーカイヴズ体制を構築するための前段階として、三年を期して当該資料の整理を完了し、公開可能な資料については、その閲覧体制を構築

する。

本事業での研究成果は、映像化できるものはウェブサイトで公開し、研究論文や関係記事は、本年度

より刊行予定の『校史・学術資産研究センター紀要(仮称)』などの機関誌において公表していく予定である。

事業紹介 校史・学術資産研究センター(二)

「國學院大學の学術資産の研究と公開」

齊藤 智朗

本事業は、國學院大學所蔵の学術資産の研究とその研究成果の公開という校史・学術資産研究センターの目的を果たす一つの方法として、学術資料館神道資料館、及び研究開発推進センターと提携し、さらには本学図書館との協力・共同の下で、本学の学術資産として図書館が所蔵する貴重書などを研究して、その成果を図書館のウェブサイトで活用し、デジタル・ライブラリーなどで活用し、公開していくものである。

存のデジタル・ライブラリーに掲載されている貴重書を研究して解説を付し、学術的な価値を見定めた上で公開していく。また本事業には、神道学や日本文学、日本史学などの若手研究者を配置し、研究開発推進機構が取り組むべき重要な課題の一つである若手育成も図る。

本事業では、具体的に、デジタル・ライブラリー掲載の貴重書の「補充」と「追加」の二つのことを並行して行う。つまり、既存のデジタル・ライブラリーに掲載されている貴重書の研究を通じて解説を付す「補充」と、学術的な価値の高い学術資産を改めて選定するデジタル・ライブラリーへの新たな「追加」ということである。

まず「補充」については、現在掲載されている貴重書に関連する研究を

図書館のデジタル・ライブラリーは、図書館所蔵の貴重書をウェブサイトで公開して、広く研究者に提供されるものとなっている。ただ、公開されている貴重書は一部を除き、当該資料の学術的な位置付けや先行研究に関する解説などがなされていない状況にある。そこで本事業では、既

専門とする研究者が中心となって解説を作成し、作成した解説は図書館を通じてデジタル・ライブラリーに随時掲載していく。

一方の「追加」については、デジタル・ライブラリーに今後掲載すべき学術資産を選定し、掲載が決定した学術資産の研究や解説の作成は、「補充」と同様、本事業に関わる研究者を中心として作成した解説とともに、随時デジタル・ライブラリーに追加していく。

本事業の初年度となる平成二十年度においては、既存のデジタル・ライブラリー掲載の貴重書に関する解説

作成に着手し、デジタル・ライブラリーに掲載すべき学術資産の選定について検討を始める。そして三年を期して、神道・日本文学・日本史関連のカテゴリーを中心に全体的な充実を図る。

本事業での研究成果は、図書館のウェブサイト上におけるデジタル・ライブラリー掲載の貴重書について、新たに解説を付すというかたちで公表していく。また、研究を通じて得た新たな知見などは、前掲の「國學院大學におけるアーカイヴズ体制の構築」と同様、本センターの機関誌などで発表する。

事業紹介 研究開発推進センター (二) 「招魂と慰霊の系譜に関する基礎的研究」

中山 郁

近年戦歿者に関する慰霊・追悼・顕彰や、いわゆる「靖國問題」に関する研究は著しい活況を呈している。しかし、靖國神社の歴史や、その背景をなす、我が国における人の魂を神として祀る信仰(「人神祭祀」)など、神道的な祭祀の歴史を踏まえ、た研究は多くなく、また、村上重良氏に代表される古典的な議論の再生

産といった研究も多数見られる。しかし、建学の精神を神道におく本学には、人神祭祀や靖國神社に代表される戦歿者に対する神道的な慰霊・祭祀(「英霊祭祀」)について、社会に対して説明してゆく責任がある。そこで、当センターにおいては、靖國神社の問題はもとより、ひろく日本における「人を神として祀る」信

仰について、主に神道研究の側から基礎的な事項を明らかにしつつ検討を加え、同時にこの分野に関する継続的な研究を行なう人的、資料的な基盤の形成を構築するため、平成十八年度から当センター教員をはじめ学内外の若手研究者有志からなる「慰霊と追悼研究会」を組織し、研究活動を開始した。

具体的な活動としては、平成十八年度および十九年度前半にかけて村上重良氏の著書『慰霊と招魂―靖國の思想―』を、さらに十九年度後半に黒田俊雄氏の論文「鎮魂の系譜―国家と宗教をめぐる点描―」を、研究会参加者全員が分担したうえで詳細に読み込み、史料に基づきながらその論旨を吟味する作業を行った。これにより先行研究の問題点と神道研究が担うべき課題について認識を深める一方、そこで出された問題意識をもとに、①研究会「靖國信仰の個人性」をめぐる(十八年十月七日)、②公開シンポジウム「日本人の靈魂観と慰霊」(十八年十月二十八日、明治聖徳記念学会との共催)、③シンポジウム「慰霊と顕彰の間―近代日本の戦死者観をめぐって―」(十九年二月十日)④シンポジウム「日本における靈魂観の変遷―「怨霊」と「英霊」をめぐる―」(二十年二月十六日)、などの研究会やシンポジウムを、学外の若

手、中堅研究者の参加を得て実施した。そのなかにおいては、果たして「慰霊」・「追悼」・「顕彰」という各概念が、実際には截然と割り切れるものではないことや、日本や東アジアにおける「供養」の文化との関連性、さらには近代における戦歿者慰霊や祭祀が、先行研究の言うように、直接御霊信仰の系譜を引いているとは必ずしもいえないことなどが議論された。なお、十九年二月に行ったシンポジウムの内容に関しては、本年七月に錦正社から刊行する予定である。

また、当研究会は平成二十年度から「招魂と慰霊の系譜に関する基礎的研究」として、改めてセンターの研究事業の一環として位置づけられたうえで本格的な調査・研究活動を推進していくことになる。具体的には、近代の靖國神社・護国神社について、とくに制度的展開過程や陸海軍との関係を明らかにするために文書調査を行う。また、神道的な戦歿者祭祀の原点とされる山口県における招魂祭祀や、中世以来仏教的な戦歿者供養の伝統を持つ高野山、さらには国外に建立された戦歿者慰霊碑に関する調査を実施する。一方、平成十九年度より継続中の『靖國之絵巻』に収録されている戦争画や、靖國神社の臨時大祭写真帳などのデジタル化作業をすすめ、本年度末には

ウェブ上で公開する予定である。

そして、研究会に關しては本年度も月に一回のペースで行うが、先に記した調査と歩調を合わせながら、研究会参加者によって、古代末期から現代に至る人神祭祀の展開を追い、近代神道における「英霊祭祀」をその流れの中に位置づけ、そのうえで招魂社や靖國神社、軍や地域共同体、仏教などの宗教団体における英霊に対する祭祀のシステムや具体像をあきらかにしてゆく予定である。その作業の一環として、本研究会に参加する学外研究者も交えたパ

ネル発表も計画中である。

なお、来年度は研究会の集大成となる論集刊行も視野に置きつつ、神道の祭祀と、それが示す靈魂觀のその歴史的展開をあと付け、日本における人神や英霊に対する祭祀を「招魂の系譜」として理解する枠組みを提示したい。これにより、国内外の社会における近代神道と靖國神社への冷静な理解を促すとともに、神道を踏まえた研究の重要性を認識させ、そのレベルの底上げを齎すことができれば幸いである。

事業紹介 研究開発推進センター (二)

「神社研究事業」

太田直之

現在、研究開発推進センターでは、研究のひとつの柱として神社に関する研究を進めている。神社とは祭祀が行われる場であるだけでなく、神に対する信仰や觀念が具体的な形をとって顕された場であり、さらに仏教をはじめとする他宗教の思想・儀礼や、異文化のもたらした諸要素の痕跡が過去から現在に至るまで併存している。神社という場には

日本歴史の中に登場してきた様々な思想・信仰が深くかつ重層的に影響を及ぼしており、こうした神社を研究することは、神道の歴史や宗教的特質だけではなく日本文化そのものの特質の明確化にも結びつくものであるといえよう。

こうした神社に関する研究活動については、幸いにして神社界からの研究資金が得られたこともあり、平

成十八年の発足当初から積極的に研究を推し進めてきた。具体的にはセンターの構成員や神社に關心を持つ研究者による研究会の開催、賀茂別雷神社(平成十八年度・京都府)、高野山大学図書館(平成十九年度・和歌山県)及び本学図書館における資料調査を実施、さらに関係図書・史料集の購入等を行うことで、神社の歴史に關する基礎的史料の収集と把握に努めてきた。

こうしたこれまでの活動を経て、本年度は参加教員・研究員が各自の研究関心に即して、学内に所蔵される神道関連史料を中核とした神社研究を行うこととした。本学には神道研究の拠点ならではの、すなわち、神道の歴史や特質を明らかにする上で注目される史料が少なからず所蔵されているが、従来これらが充分に活用され、公開されてきたとは言い難い。本学所蔵史料を中軸に据えたのは、こうした史料を基にして研究を行い、その成果を公開・発信することが、本学における神道研究の発展だけでなく、学外の宗教研究や日本文化研究を促進させることにも裨益し得ると考えたからである。

本年度は学内の研究対象史料及び学外関連史料の調査を行い、さらに分野や時代を異にする多彩な研究者による研究会を開催し、より広い視野からの研究を心がけ、本事業によ

る研究成果を基にして、年度末には論文集を刊行する予定である。若手研究者の自発的な研究活動が基本であるため、不十分な面も多くあるかと思うが、趣旨を貫く意欲を持続させ、できうる限り納得のいく成果を生み出したい。

事業紹介 研究開発推進センター (三)

「二十一世紀COEプログラム」「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」後継事業

研究開発推進センターでは、文部科学省二十一世紀COEプログラムに採択された建学の精神に基づく拠点形成事業「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」を継承し、本学が神道・日本文化研究の研究拠点としてさらに発展するための二つの事業を行っている。以下、その詳細を紹介する。

(一)「国学関連人物データベース」の作成

松本 久史

「国学関連人物データベース」は、平成十八年度まで実施された國學院大學二十一世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」の後継事業として、近世・近代の国学者および関連する人物を取り上げ、わが国固有の文化がどのように顧みられ、あるいは持続・展開されていったのかを示す基礎データを広く提供するために作成されている。昨年度は、『古学小伝』に記載のある国学者八十四名について、項目ごとの典拠を明確にし、より詳細な解説欄の作成を実施した。現在、研究開発推進センターに所属するポストドク研究員・研究補助員などの若手研究者が参画して資料の調査・蒐集およびデータの入力作業に従事している。

これまでに拠点形成事業の成果と

して、五十音順にア行の人物を対象として二千名分が本学のホームページ上に公開されており

(<http://21coe.kokugakuin.ac.jp/db2/kokugaku/>)、地域毎での検索が可能であるが、今後本格的に運用が始まる研究開発推進機構「デジタル・ミュージアム」の中に組み込まれて公開される予定である。それ

向け、従来から準備していた約一万五千名分のデータの新規公開のため、それぞれの項目に見合う個別検索の新設と、研究面に資すること重視し、新たな作業も進められている。主要国学者の門人帳から六千二百名、『国学者伝記集成』に掲載されている国学者六百名を対象とした基礎項目のデータ入力をほぼ終えており、今後、デジタル化を進めている文献・碑文、肖像画などもデータベースに組み込み、順次公開していく予定である。また、本学が所蔵する近世・近代の著作史料につ

いても、広く若手研究者や大学院生も参加して調査・検討を行い、それらの成果についても、今後データベースに反映させていく予定である。

(二) 海外大学の国際交流事業

加瀬 直弥

神道と日本文化に関する世界的な拠点を形成することは、二十一世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」の重要な趣旨であった。当該プログラム推進中から本センターでは、海外の研究機関に所属する若手研究者と研究交流を深める体制を作ることを計画し、神社界からの寄付金等により、海外の神道・日本文化研究機関との提携に関する調査等を実施してきた。

そうした中で、本学が海外研究機関と国際交流を進める上での課題として浮き彫りになった点は、本学の有する神道・日本文化研究の学術的知見や研究資産が知られていないということであり、また、海外の研究動向を理解しつつこの大学で神道・日本文化に関する研究を行おうとする研究者はごくわずかであるという点であった。そこで、海外の研究者に対して、本学が神道・日本文化研究の拠点であることを示すと共に、本学の若手研究者・大学院生に対して、海外でいかなる神道・日本文化研究がなされているのかという点を体得してもらうため、平成十八

年度に包括的な研究交流に関する合意を果たした英国ロンドン大学東洋アフリカ学学院(SOAS)の若手研究者及び大学院生との研究交流会「日本宗教文化の歴史の展開」を、平成十九年十一月に実施した。

この研究会では、中世から現代までの時代ごとにセッションを設け、参加した若手研究者・大学院生等の関心に即した発表が行われた。宗教文化という専門的な内容でありながら、その発表はいずれも実証的な調査結果に基づいたものであり、相応なレベルの発表となった。他方、日本における宗教史の実態をより広い視野から把握する機会を設けることの必要性も、参加者で共有することができた。

本年度も、同様の研究交流が継続して行えるよう、SOASとの提携関係を深めていく一方で、米国アイマスト大学のトレント・マクシー氏等、外国の日本研究者を招聘して、神道・日本文化に関連する研究領域についての講演等を行う予定である。

また本センターでは、ハーバード大学エドウィン・O・ライシャワー日本研究所への研究員派遣に関するマネジメントも行っており、現在は本年九月から同研究所へ着任する予定の西高辻信宏共同研究員の支援を行っている。同研究所との研究交流の深化を見据え、こうした事業を継続していく計画である。

平成20年度 研究開発推進機構 事業計画及び人事一覧

(*は責任担当者)

機関	事業名	専任教員	兼任教員	客員研究員	PD 研究員	研究補助員	客員教授	共同研究員
A 日本文化研究所	デジタル・ミュージアムの構築と展開	平藤喜久子 星野靖二	*井上順孝 石井研士 N・ヘイヴンズ 黒崎浩行	市川 収	市田雅崇 大澤広嗣	李 和珍 J・ラフィーバ L・ココラ	K・ナカイ 関守ゲイノ	A・アイフラ 江島尚俊 E・シッケタンツ 高橋典史 武井順介 D・フィルス 松本喜以子 山田美紀子
	近世国学の靈魂観をめぐるテキストと実践の研究-霊祭・霊社・神葬祭-	*松本久史 遠藤 潤 中野裕三			星野光樹	三ツ松誠 小林威朗	林 淳	
B 学術資料館	近代学術資産のデジタル化・データベース化による再生活用の研究-柴田常恵拓本資料・宮地直一神社絵葉書資料を中心に-	内川隆志 加藤里美 加瀬直弥	*小川直之 黒崎浩行			田中秀典 新原佑典 齋藤しおり		
	考古学資料館収蔵資料の再整理・修復および基礎研究・公開	内川隆志 加藤里美	*吉田恵二 谷口康浩	伊藤博司		中村耕作		粕谷 崇 阿部常樹
	山形県庄内町須部野A遺跡学術調査-元羽黒に所在する羽黒信仰の祭祀考古学的研究-	内川隆志	*吉田恵二 青木 豊			戴下詩乃		
神道資料館	神道資料の整理公開と学術的価値の探求	*加瀬直弥 森 悟朗	*岡田莊司					
C 校史・学術資産研究センター	國學院大學における大学アーカイヴズ体制の構築	藤田大誠 森 悟朗 齊藤智朗	*阪本是丸			宮部香織		
	國學院大學の学術資産の研究と公開	松本久史 太田直之 加瀬直弥 藤田大誠 新井大祐 齊藤智朗	*阪本是丸 岡田莊司 千々和到 青木周平 根岸茂夫 針本正行 松尾葦江	堀越祐一	宮原一郎	荒木優也 倉住 薫 笹川 勲		
D 研究開発推進センター		新富康史 夏秋英房 太田直之 加瀬直弥 中野裕三 中山 郁 菅 浩二 藤田大誠 新井大祐 森 悟朗	*阪本是丸		星野光樹 宮本誉士 中村 聡 戸浪裕之	大東敬明		津田 勉 佐藤一伯 嘉山 澄 大河内千恵 細貝眞理 西高辻信宏
E 伝統文化リサーチセンター	プロジェクト名					リサーチアシスタント		
	祭祀遺跡に見るモノと心	内川隆志 加藤里美	*杉山林継 吉田恵二 小川直之 青木 豊 谷口康浩 深澤太郎	阿部昭典	加藤元康 田中大輔 外国人研究員 高 慶秀	新原佑典	小林達雄 小林青樹 西本豊弘 S・ケイナー 藥 豊實 松本岩雄 内山純蔵	中村 大 宮尾 亨 笹生 衛 細谷 葵 佐々木雅裕 栗木 崇 錦田剛志 浪形早季子
	神社祭礼に見るモノと心	太田直之 加瀬直弥	*茂木貞純 沼部春友 岡田莊司 茂木 栄 西岡和彦	島田 潔 池谷浩一	小島優子 筒井 裕	新木直安 鈴木聡子 横山直正	櫻井治男 牟禮 仁 藤澤 彰	藤本頼生 佐藤一伯 岸川雅範
國學院の学術資産に見るモノと心	松本久史 遠藤潤 齊藤智朗 藤田大誠	*青木周平 武田秀章 大和博幸 阪本是丸			戸浪裕之 渡邊 卓	齋藤しおり 大東敬明 中村耕作	益井邦夫 秋元信英 三宅守常	

平成20年度 研究開発推進機構 人事一覽

平成20年4月1日

機構長	阪本是丸					
副機構長	井上順孝					
教授（専任）	新富康央					
教授（兼任）	青木周平 阪本是丸	青木 豊 千々和到	石井研士 根岸茂夫	井上順孝 針本正行	岡田莊司 松尾葦江	小川直之 吉田恵二
准教授（専任）	内川隆志 夏秋英房					
//（兼任）	黒崎浩行 谷口康浩 N・ヘイヴンズ					
講師（専任）	松本久史 太田直之 加瀬直弥 加藤里美 平藤喜久子					
講師（特別専任）	中野裕三 中山 郁					
助教（専任）	遠藤 潤 齊藤智朗 菅 浩二 藤田大誠 星野靖二					
助教（特別専任）	新井大祐 森 悟朗					
客員研究員	市川 収 伊藤博司 堀越祐一					
ポスドク研究員	市田雅崇 宮部香織 大澤広嗣 宮本誉士 戸浪裕之 中村 聡 星野光樹 宮原一郎					
研究補助員	荒木優也 J・ファイバ 藪下詩乃 李 和珍 新原佑典 L・ココラ 倉住 薫 大東敬明 小林威朗 田中秀典 齋藤しおり 中村耕作 笹川 勲 三ツ松誠					
客員教授	K・ナカイ 関守ゲイノ 林 淳					
共同研究員	A・アイワ 阿部常樹 江島尚俊 E・シッケンツ 大河内千恵 粕谷 崇 嘉山 澄 佐藤一伯 高橋典史 武井順介 津田 勉 D・フィリス 西高辻信宏 細貝眞理 松本喜以子 山田美紀子					

平成20年度 伝統文化リサーチセンター 人事一覽

(文部科学省オープンリサーチセンター選定事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」推進)

センター長	杉山林継					
教授（兼任）	青木周平 杉山林継	青木 豊 武田秀章	大和博幸 沼部春友	岡田莊司 茂木貞純	小川直之 吉田恵二	阪本是丸
准教授（専任）	内川隆志					
//（兼任）	谷口康浩 西岡和彦 茂木 栄					
講師（専任）	松本久史 太田直之 加瀬直弥 加藤里美					
助教（専任）	遠藤 潤 齊藤智朗 藤田大誠					
助手（兼任）	深澤太郎					
客員研究員	阿部昭典 池谷浩一 島田 潔					
ポスドク研究員	加藤元康 小島優子 田中大輔 筒井 裕 戸浪裕之 渡邊 卓					
外国人研究員	高 慶秀					
リサーチアシスタント	新木直安 横山直正 斎藤しおり 新原佑典 鈴木聡子 大東敬明 中村耕作					
客員教授	秋元信英 内山純蔵 S・ケイノ 小林青樹 小林達雄 櫻井治男 西本豊弘 藤澤 彰 益井邦夫 松本岩雄 三宅守常 牟禮 仁 欒 豊實					
共同研究員	岸川雅範 栗木 崇 佐々木雅裕 笹生 衛 佐藤一伯 中村 大 浪形早季子 錦田剛志 藤本頼生 細谷 葵 宮尾 亨					

【事務局】

学術メディアセンター事務部長	橋本幸典					
研究開発推進機構事務課長（兼務）	橋本幸典					
研究協力担当課長	山口輝幸					
研究協力担当	須田佳代 小林信久 熱田匡紀 田辺美代子					
研究開発推進機構担当	鍋島秋美 朝比奈友 門平浩司 小平浩衣 益井邦夫					
学術メディアセンター事務部主幹	堀内弘行					

彙報

会議

○全体

- ・平成十九年度第七回企画委員会、十二月十二日(水) 十一時～十二時三十分 日本文化研究所プロジェクトルーム
- ・研究開発推進機構規程改正会議、十二月二十日(木) 十時三十分～十二時三十分 本館三階会議室
- ・第八回企画委員会、平成二十年一月三十日(水) 十一時～十二時三十分 日本文化研究所プロジェクトルーム
- ・第四回運営委員会 二月二十日(水) 十六時二十五分～十七時四十分 若木タワー〇五会議室
- ・第九回企画委員会、三月十四日(火) 十一時～十二時三十分 日本文化研究所プロジェクトルーム
- ・平成二十年度全員連絡会、四月十六日(水) 十六時～十八時 若木タワー十八階有栖川宮記念ホール
- ・第一回企画委員会、四月二十三日(水) 十一時～十二時三十分 AMC棟〇六会議室
- ・〇六会議室
- ・第一回人事委員会、四月二十三日(水) AMC棟〇六会議室
- ・第一回資格審査委員会、四月二十三

日(水) AMC棟機構プロジェクトルーム(1)

- ・第一回運営委員会、四月二十三日(水) 十四時～十五時三十分 AMC棟〇六会議室

○日本文化研究所

- ・平成十九年度第七回デジタルミュージアム企画会議、一月十七日(木) 十五時三十分～十七時三十分 日本文化研究所プロジェクトルーム
- ・平成十九年度第四回日本文化研究所所員会議、一月二十二日(火) 十時三十分～十二時 若木タワー〇五会議室
- ・平成二十年度第一回日本文化研究所所員会議、四月十七日(木) 十六時～十七時 AMC棟〇六会議室
- ・平成二十年度第一回「デジタルミュージアムの構築と展開」プロジェクト会議、四月二十四日(木) 十時三十分～十二時三十分 AMC棟機構プロジェクトルーム(2)

- ・平成二十年度第一回「近世国学者の靈魂観をめぐる思想と行動の研究」プロジェクト会議、四月二十四日(木) 十時三十分～十二時 AMC棟〇六会議室
- ・平成二十年度第一回「デジタルミュージアム企画会議、五月十五日(木) 十六時～十七時 AMC

棟〇六会議室

○学術資料館

- ・平成十九年度第三回学術資料館会議、平成二十年一月二十六日(土) 十三時～十四時 若木タワー〇四会議室
- ・第四回学術資料館会議、二月二十日(水) 十時三十分～十二時 若木タワー〇三会議室
- ・平成二十年度第一回学術資料館会議、四月十八日(金) 十六時～十七時三十分 若木タワー〇一会議室

○校史・学術資産研究センター

- ・平成二十年度第一回校史・学術資産研究センター会議、四月十七日 十四時二十分～十五時三十分 AMC棟機構プロジェクトルーム(2)
- ・公開講座・講演会・シンポジウム(平成十九年十一月一日以降)(登壇者の肩書は開催時)

○全体

- ・平成十九年度公開学術講演会「まつりの心と形」、講師：小林達雄、十一月十日(土) 午後一時三十分～三時三十分、百二十年周年記念二号館二二〇三教室

○校史・学術資産研究センター

- ・「カミ信仰をめぐる国学的資料研究の確立」学術調査報告会、報告者：杉山林継、松本久史、加藤里美、齋藤ミチ子、田中秀典、横山直正、松本美和子、平成二十年三月九日(日) 十四時～十六時三十分、松江市美保関町地区公民館

○研究開発推進センター

- ・シンポジウム「日本における靈魂観の変遷」、慰霊と追悼研究会、パネリスト：山田雄司(三重大学人文学部准教授)、武田秀章、今井昭彦(埼玉県立川本高等学校教諭) コメントータ：三土修平(東京理科大学理学部教授)、中山郁司会：藤田大誠
- ・平成二十年二月十六日(土) 十三時～十八時、百二十年周年記念二号館 一三〇二教室

- ・「日本宗敎文化の歴史的展開」、ロンドン大学東洋アフリカ学院(SOAS)との共同研究会、発表者：ベネデッタ・ロミ(SOAS)、大東敬明、カルラ・トロヌ・モンタネー(SOAS)、井関大介(東京大学大学院博士課程)、アラン・カミングス(SOAS)、中村聡、トゥリオ・ロベッティ(SOAS)、小林瑞穂(大学院博士課程後期)

- ・平成十九年十一月三十日(金) 十時～十七時 若木タワー〇二会議室

出張

- ◇加藤里美 「カミ信仰をめぐる国学的資料研究の確立」プロジェクトによる調査のため、美保神社、十二月十六日(土)
- ◇加藤里美 学術資料館(考古学資料館) 展示資料作成・検収のため、大神神社、京都府京都市模製製作工場、十二月十七日(日)
- ◇高塩博 「幕藩刑法とその刑罰の研究」プロジェクトによる講演のため、國學院大學栃木短期大学、一月三十日(水)
- ◇齊藤智朗 「カミ信仰をめぐる国学的資料研究の確立」プロジェクトによる調査のため、出雲市役所大社支所、一月三十一日(木) 二月一日(金)
- ◇大澤広嗣 「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクトによる調査のため、三峯神社、二月三日(日)
- ◇堀越祐一 「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクトによる調査のため、山口県内諸社寺、山口県文書館、毛利博物館、二月十一日(月) 十五日(金)
- ◇高塩博 「幕藩刑法とその刑罰の研究」プロジェクトによる調査のため、佐久市教育委員会臼田町誌編纂室、二月十三日(水) 十五日

日(金)

- ◇遠藤潤 「近世国学の靈魂観をめぐる思想と行動の研究」プロジェクトによる調査のため、豊橋市中央図書館、西尾市岩瀬文庫、二月十四日(木) 十六日(土)
- ◇三ツ松誠 「近世国学の靈魂観をめぐる思想と行動の研究」プロジェクトによる調査のため、豊橋市中央図書館、西尾市岩瀬文庫、二月十四日(木) 十六日(土)
- ◇杉山林継 「カミ信仰をめぐる国学的資料研究の確立」プロジェクトによる調査のため、美保神社、島根県立古代文化センター・古代出雲歴史博物館、三月八日(土) 十一日(火)
- ◇松本久史 「カミ信仰をめぐる国学的資料研究の確立」プロジェクトによる調査のため、美保神社、島根県立古代文化センター・古代出雲歴史博物館、三月八日(土) 十一日(火)
- ◇横山直正 「カミ信仰をめぐる国学的資料研究の確立」プロジェクトによる調査のため、美保神社、島根県立古代文化センター・古代出雲歴史博物館、三月九日(日) 十一日(火)
- ◇田中秀典 「カミ信仰をめぐる国学的資料研究の確立」プロジェクトによる調査のため、美保神社、

島根県立古代文化センター・古代出雲歴史博物館、三月九日(日) 十日(月)

- ◇加藤里美 「カミ信仰をめぐる国学的資料研究の確立」プロジェクトによる調査のため、美保神社、島根県立古代文化センター・古代出雲歴史博物館、三月九日(日) 十三日(木)
- ◇新原佑典 「カミ信仰をめぐる国学的資料研究の確立」プロジェクトによる調査のため、美保神社、島根県立古代文化センター・古代出雲歴史博物館、三月九日(日) 十三日(木)
- ◇平藤喜久子 「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクトによる調査のため、皇祖皇太神宮、三月九日(日)
- ◇大澤広嗣 「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクトによる調査のため、鹽竈神社、大和教団・大國神社、三月十日(月)
- ◇ヘイヴンズ・ノルマン 「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクトによる調査のため、春日大社、八坂神社、賀茂神社、田縣神社、三月十三日(木) 十五日(土)
- ◇市田雅崇 「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクト

による調査のため、大原八幡宮、英彦山神宮、宇佐神宮、三月十四日(金) 十六日(日)

- ◇平藤喜久子 「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクトによる調査のため、熱田神宮、三月十七日(日)
- ◇井上順孝 「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクトによる調査のため、祖神道本部(熊本県)、三月十七日(月) 十九日(水)
- ◇高塩博 「幕藩刑法とその刑罰の研究」プロジェクトによる調査のため、丸亀市立資料館、三月十七日(月) 十九日(水)
- ◇加藤里美 「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクトによる調査のため、西宮神社(兵庫県)、三月二十二(土) 二十三日(日)
- ◇田中秀典 「デジタル・ミュージアムの構築と展開」プロジェクトによる調査のため、西宮神社(兵庫県)、三月二十二(土) 二十三日(日)

資料紹介 拳手人面土器(考古学資料館所蔵)



ここに紹介する資料は、人面を付した胴部と口縁部に両手を貼り付けた極めて稀少な祭祀遺物で、他に類例のない国内唯一の資料である。この特殊な土器は、昭和二十八年(一九五三)刊行の『信濃』第五巻第一号に掲載された永峯光一の報告

文「長野県上高井郡保科村片山発見異形土器の出土状態に就いて」によると、昭和二十二年(一九四七)五月末須坂農業高等学校生徒であった雪入益見氏が、長野県上高井郡保科村上和田地区字片山(現長野市若穂保科上和田)の同家所有畑地で、大

石を除去した跡から発見された。同氏はその大石の付近を丹念に探した結果、拳手人面土器をはじめとする壺や高杯など数個の土器を発見したのである。発見地は埴科郡と上高井郡との境界線が走る奇妙山から伸びた一支脈の、東北斜面の山懐に形成された小規模な崖錐の中腹にあたる。出土地点は片山崖錐の中央を登る小道の西側、四四〇メートルの等高線が通る付近で、以前大神宮祠のあった場所に隣接する眺望のよい畑の一隅の西側にあった柱状の大石を引き抜いた場所から最初に壺の破片が発見されたという。柱状石は、安山岩で、長さ一メートル強、断面は六十センチメートル程でやや西に傾いて地上には四・五センチメートルの高さで現れていたらしく、拳手人面土器をはじめとした遺物群は、地下三十センチメートルの粘土中、西傾した柱状石の影になるような位置に列をなして並んでいたということである。発見地の付近には大星山古墳群、和田東山古墳群が存在し、出土遺物の中で古いものは四世紀後半まで遡る可能性が指摘されており、年代的に本遺物群と年代的に近いことからこれらの古墳群との関係性は看過できないところである。

さて、拳手人面土器は、最大高二十センチメートル、幅十四・五センチメートル、厚さ十二・九センチメートルで、片手を欠損しており、片耳は一度剥離してしまっているが、遺存状況は良好である。技法的には内面に帯状の接合痕が観察されることから粘土を輪積みして製作されている。手、耳は胴部形成後に貼り付けられたものと考えられる。外面には部分的にミガキ痕が観察され、内面には大胆なヘラ削り調整が行われている。色調は暗黄褐色で、胎土は肌色に近い褐色粒子、砂粒を含みザックリとした感じである。伴出遺物には、壺三点、高杯六点、器台一点などがあり(現時点での考古学資料館収蔵資料)、壺や高杯には朱などの赤色顔料によって赤彩されている。何れも信州の在地系土器で、概ね四世紀中頃に位置づけられる資料である。拳手人面土器そのものについては、極めて特殊な資料であるが故に性格や年代を明らかにすることは困難であるものの、その特殊性は誰しもが日常什器ではなく祭祀に係わる道具であることで意見は一致する。